

化鳥

泉鏡花作

一

愉快おもしろいな、愉快おもしろいな、お天氣てんきが悪わるくつて外そとへ出でて
遊あそべなくつても可いいや、笠かさを着きて、蓑みのを着きて、雨あめの
降ふるなかをびしょ／＼濡ぬれながら、橋はしの上うへを渡わたつて
行ゆくのは猪いのししだ。

菅笠すげがさを目深まぶかに被かぶつて、飛沫しぶきに濡ぬれまいと思おもつて向むかひ
風かぜに俯うつむ向むいてるから顔かほも見みえない、着きて居ゐる蓑みのの裾すそ
が引摺ひきずつて長ながいから、脚あしも見みえないで歩ある行ゆくいて行ゆくく、
脊せの高たかさは五尺ごしゃくばかりあらうかな、猪いのししとしては大おほき
ものよ、大方おほかた猪いのししの中なかの王様わうさまが彼様あんなさんかくなり冠かんむりを被きて、
市まちへ出でて來きて、而そして、私わたしの母様おつかさんの橋はしの上うへを通とほるの
であらう。

トかう思おもつて見みて居ゐると愉快おもしろい、愉快おもしろい、愉快おもしろい、愉快おもしろい。

寒さむい日ひの朝あさ、雨あめの降ふつてる時とき、私わたしの小ちひさな時分じぶん、
何日いつかでしたつけ、窓まどから顔かほを出だして見みて居ゐました。

「おつかさん、愉快的おもしろなものが歩あるいて行くよ。」

爾時そのときおつかさん、私わたしの手袋てぶくろを拵こしらへて居ゐて下くだすつて、

「さうかい、何がなに通とほりました。」

「あのウ猪みのし。」

「さう。」といつて笑わらつて在いらつしやる。

「ありや猪みのしだねえ、猪みのしの王様わうさまだねえ。」

おつかさん、母様おつかさん。だつて、大いおほきんだもの、そして三角形さんかくなりの冠かんむり

を被きて居ゐました。さうだけれども、王様わうさまだけれども、

雨あめが降ふるからねえ、びしよぬれになつて、可哀相かはいそうだ

つたよ。」

母様おつかさんは顔かほをあげて、此方こつちをお向むきで、

「吹込ふきこみますから、お前まへも此方こつちへおいで、そんな

にして居ゐると、衣服きものが濡ぬれますよ。」

「戸とを閉しめよう、母様おつかさん、ね、こゝん處ところの。」

「いゝえ、さうしてあけて置おかないと、お客様きやくさまが

通とほつても橋はし銭せんを置おいて行いつてくれません。ずるいか

らね、引籠ひっこもつて誰だれも見みて居ゐないと、そゝくさ通とほ抜け

てしまひますもの。」

わたし、私わたしは其時分そのじぶんは何なんにも知しらないで居ゐたけれども、母おつか

様と二人ぐらしは、この橋錢で立つて行つたので、
一人前幾干宛取つて渡しました。

橋のあつたのは、市を少し離れた處で、堤防に松
の木が並んで植つて居て、橋の袂に榎が一本、時雨
榎とかいふのであつた。

此榎の下に、箱のやうな、小さな、番小屋を建
て、其處に母様と二人で住んで居たので、橋は粗
造な、宛然、間に合せといつたやうな拵へ方、杭の
上へ板を渡して竹を欄干にしたばかりのもので、そ
れでも五人や十人ぐらゐ一時に渡つたからツて、少
し揺れはしようけれど、折れて落ちるやうな憂慮は
ないのであつた。

ちやうど市の場末に住んでる日傭取、土方、人足、
それから、三味線を弾いたり、太鼓を鳴して飴を賣
つたりする者、越後獅子やら、猿廻やら、附木を賣
る者だの、唄を謡ふものだの、元結よりだの、早附
木の箱を内職にするものなんぞが、目貫の市へ出て
行く往歸りには、是非母様の橋を通らなければなら
ないので、百人と二百人づゝ朝晩一賑かな人通りが
ある。

それからまた向うから渡つて来て、この橋を越して場末の穢い町を通り過ぎると、野原へ出る。そこ
ン處は梅林で、上の山が櫻の名所で、其下に桃谷といふのがあつて、谷間の小流には、菖蒲、燕子花が一杯咲く。頬白、山雀、雲雀などが、ばら／＼になつて唄つて居るから、綺麗な着物を着た問屋の女だの、金満家の隠居だの、瓢を腰へ提げたり、花の枝をかついだりして千鳥足で通るのがある。それは春のことで。夏になると納涼だといつて人が出る。秋は蕨狩に出懸けて来る、遊山をするのが、皆内の橋を通らねばならない。

この間も誰かと二三人づれで、学校のお師匠さんが、内の前を通つて、私の顔を見たから、丁寧にお辭儀をすると、おや、といったきりで、橋錢を置かないで行つてしまつた。

「ねえ、母様、先生もずるい人なんかねえ。」
と窓から顔を引込ませた。

「お心易立こころやすだてなんでせう、でもずるいんだよ。餘程よつほどさういふかと思つたけれど、先生せんせいだといふから、また、そんなことで悪く取つて、お前まへが憎まれでもしちやなるまいと思つて、黙つて居ました。」

といひ／＼母様おつかさんは縫つて在らつしやる。

お膝ひざの上に落ちて居た、一ツの方ほうの手袋てぶくろの、恰好かつかうが出来たのを、私わたしは手に取つて、掌てのひらにあてゝ見たり、甲かぶの上へ乗ツけて見たり、

「母様おつかさん、先生せんせいはね、それでなくつても僕ぼくのことを可愛かはひがつちやあ下くださらないの。」

と訴うったへるやうにいひました。

かういつた時に、學校がっこうで何なんだか知らないけれど、私わたしがものをいつても、快こころよく返事へんじをおしでなかつたり、拗すねたやうな、けんどんなやうな、おもしろくない言ことばをおかけであるのを、いつでも情なさけないと思ひ／＼して居たのを考かんがへ出して、少すこし鬱ふさいで來て俯うつむ向むいた。

「何故なぜさ。」

何なに、さういふ様子やうすの見えるのは、つい四し五ご日前にちまへか

らで、其前には些少もこんなことはありはしなかつた。歸つて母様にさういつて、何故だか聞いて見ようと思つたんだ。

けれど、番小屋へ入ると直飛出して遊んであるいで、歸ると、御飯を食べて、そしちやあ横になつて、母様の氣高い美しい、頼母しい、穩當な、そして少し痩せておいでの、髪を束ねてしつとりして在らしやる顔を見て、何か談話をしいしい、ばつちりと眼をあいてるつもりなのが、いつか、其まんまで寝てしまつて、眼がさめると、また直支度を濟して、學校へ行くんだもの。

そんなこといつてる隙がなかつたのが、雨で閉籠つて、淋しいので思ひ出した、次手だから聞いたので。

「何故だつて、何なの、此間ねえ、先生が修身のお談話をしてね、人は何だから、世の中に一番えらいものだつて、さういつたの。母様、違つてるわねえ。」

「むゝ。」

「ねッ違つてるワ、母様。」

と揉くちやにしたので、吃驚して、ぴつたり手を
ついて疊の上で、手袋をのした。横に皺が寄つたか
ら、引張つて、

「だから僕、さういつたんだ、いゝえ、あの、先
生、さうではないの。人も、猫も、犬も、それから
熊も、皆おんなじ動物だつて。」

「何とおつしやつたね。」

「馬鹿なことをおつしやいつて。」

「さうでせう。それから、」

「それから、(だつて、犬や、猫が、口を利きま
すか、ものをいひますか)ツて、さういふの。いひ
ます。雀だつてチツチツチツチつて、母様と、父様
と、兒と朋達と皆で、お談話をしてるぢやありません
せんか。僕眠い時、うつとりしてる時なんぞは、耳
ン處に来て、チツチツチて、何かいつて聞かせます
のツてさういふとね、(詰らない、そりや轉るんで
す。ものをいふのぢやあなくツて轉るの、だから何
をいふんだか分りますまい)ツて聞いたよ。僕ね、
あのウだつてもね、先生、人だつて、大勢で、皆が
體操場で、てんでに何かいつてるのを遠くン處で聞
いて居ると、何をいつてるのか些少も分らないで、

ざあ／＼ツて流れてる川の音とおんなしで、僕分り
ませんもの。それから僕の内の橋の下を、あのウ舟
漕いで行くのが何だか唄って行くけれど、何をいふ
んだかやつぱり鳥が聲を大きくして長く引ばつて鳴
いてるのと違ひませんもの。ずっと川下の方で、ほ
う／＼ツて呼んでるのは、あれは、あの、人なんか、
犬なんか、分りませんもの。雀だつて、四十雀だつ
て、軒だの、榎だのに留つてないで、僕と一所に坐
つて話したら皆分るんだけれど、離れてるから聞え
ませんの。だつて、ソツとそばへ行つて、僕、お談
話しようと思ふと、皆立つていつてしまひますもの、
でも、いまに大人になると、遠くで居ても分ります
ツて。小さい耳だから、澤山いろんな聲が入らない
のだつて、母様が僕、あかさんであつた時分からい
ひました。

犬も猫も人間もおんなじだつて。ねえ、母様、だね
え母様、いまに皆分るんだね。」

母様は莞爾なすつて、

「あゝ、それで何かい、先生が腹をお立ちのかい。」
 そればかりではなかつた、私の兒心にも、アレ先生が嫌な顔をしたな、ト斯う思つて取つたのは、まだモ少し種々なことをいひあつてから、それから後の事だ。

はじめは先生も笑ひながら、ま、あなたが左様思つて居るのなら、しばらくさうして置ませう。けれども人間には智慧といふものがあつて、これには他の鳥だの、獣だのといふ動物が企て及ばないといふことを、私が河岸に住まつて居るからつて、例をあげておさとしてあつた。

釣をする、網を打つ、鳥をさす、皆人の智慧で、何も知らない、分らないから、つられて、刺されて、たべられてしまふのだトかういふことだつた。そんなことは私聞かないで知つて居る、朝晩見て居るもの。

橋を挟んで、川を溯つたり、流れたりして、流網

をかけて魚を取るのが、川中に手拱かいて、ぶる／＼ふるへて突立つてるうちは、顔のある人間だけれど、そらといつて水に潜ると、逆になつて、水潜をしい／＼五分間ばかりも泳いで居る、足ばかりが見える。其足の恰好の悪さといつたらない。うつくしい、金魚の泳いでる尾鱗の姿や、ぴら／＼と水銀Rubyv色を輝かして跳ねてあがる鮎なんぞの立派さには全然くらべものになるのぢやあない。さうしてあんな、水浸になつて、大川の中から足を出してる、そんな人間がありますものか。で、人間だと思ふとをかしいけれど、川中から足が生えたのだと、さう思つて見て居るとおもしろくツて、ちつとも嫌なことはないのです、つまらない観世物を見に行くより、ずっとましなのだつて、母様がさうお謂ひだから、私はさう思つて居ますもの。

それから、釣をしてますのは、ね、先生、とまた其時先生にさういひました。あれは人間ぢやあない、葦なんぞ、御覧なさい。片手懐つて、ぬうと立つて、笠を被つてる姿といふものは、堤防の上に一本占治茸が生えたのに違ひません。

夕方ゆふがたになつて、ひよる長い影ながかげがさして、薄暗うすくらい鼠ねずみ色の立姿たちすがたにでもなると、ます／＼占治しめぢ草くさで、ずつと遠とほい／＼處ところまで一ひとならびに、十人にんも三十人にんも、小さいのだの、大きいのだの、短みじかいのだの、長ながいのだの、一番橋手前いちばんばしてまへのを頭かしらにして、さかり時は毎日まいにち五六十本ほんも出で来るので、また彼處あつちこつち此方こつちに五六人にんづゝも一團ひとかたまりになつてるのは、千本せんほんしめぢツて、くさ／＼に生はえて居ゐる、それは小ちひさいのだ。木きだの、草くさだのだと、風かぜが吹ふくと動うごくんだけれど、蕈きのこだから、あの、蕈きのこだからゆつさりとしもしませぬ。これが智ち慧ゑがあつて釣つりをする人間にんげんで、些ちつと少うごくも動うごかない。其間そのあひだに魚うをは皆みんなで悠々いづくと泳およいであるいて居ゐますわ。また智ち慧ゑがあるつても、口くちを利きかれないから鳥とりとくらべツこすりや、五分ごぶ々々／＼がある、それは鳥とりさしで。

過日いつかみ見たみたことがありました。

餘所よそのをぢさんの鳥とりさしが來きて、私わたしん處ところの橋はしの詰つめで、榎えのきの下したで立留たつどまつて、六本ほんめの枝えだのさきに可か愛はいい頬白ほくしろが居ゐたのを、棹さでもつてねらつたから、あら／＼ツてさういつたら、叱しツ、黙だまつて、黙だまつて、恐こはい。

い顔をかほして私わたしを睨ねめたから、あとじさりをして、そ
ツと見て居ゐると、呼吸いきもしないで、ぢつとして、石いし
のやうに黙だまつてしまつて、かう据身すゑみになつて、中空なかぞら
を貫つゐくやうに、じりつと棹さをのばして、覗ねらつてるの
に、頬白ほくじろは何なんにも知しらないで、チ、チ、チツチツて
ツて、おもしろさうに、何なにかいつてしやべつて居ゐま
した。其それをとう／＼突ついてさして取とると、棹さのさき
で、くる／＼と舞まつて、まだ烈はげしく聲こゑを出だして鳴ない
てるのに、智慧ちゑのある小父をぢさんの鳥とりさは、黙だまつて、
鱈たら掴つかにして、腰こしの袋ふくろ中なかへ捻ねぢり込こんで、それでもま
だ黙だまつて、ものもいはないで、のつそり去いつちまつ
たことがあつたんで。

四

頬白は智慧のある鳥さしにとられたけれど、囀つてましたもの。ものをいつて居ましたもの。をぢさんは黙りで、傍に見て居た私までものを言ふことが出来なかつたんだもの。何もくらべっこして、どつちがえらいとも分りはしないつて。

何でもそんなことをいつたんで、ほんたうに私さう思つて居ましたから。

でも、其を先生が怒つたんではなかつたらしい。で、まだ／＼いろんなことをいつて、人間が、鳥や獣よりえらいものだとなういつておさとしてあつたけれど、海中だの、山奥だの、私の知らない、分らない處のことばかり譬に引いていふんだから、口答は出来なかつたけれど、ちつともなるほど思はれるやうなことはなかつた。

だつて、私、母様のおつしやること、虚言だと思ひませんもの。私の母様がうそをいつて聞かせますものか。

先生は同一組の小兒達を三十人も四十人も一人で可愛がらうとするんだし、母様は私一人可愛いんだ

から、何うして、先生のいふことは私を欺すんでも、母様がいつてお聞かせのは、決して違つたことではない、トさう思つてるのに、先生のは、まるで母様のと違つたこといふんだから心服はされないぢやありませんか。

私が頷かないので、先生がまた、それでは、皆あなたの思つてる通りにして置きますせう。けれども木の、草だのよりも、人間が立ち優つた、立派なものであるといふことは、いかな、あなたにでも分りませう、先づそれを基礎にして、お談話をしようからつて、聞きました。

分らない、私さうは思はなかつた。

「あのウ母様、(だつて、先生、先生より花の方がうつくしうございます)ツてさう謂つたの。僕、ほんたうにさう思つたの、お庭にね、ちやうど菊花の咲いてるのが見えたから。」

先生は束髪に結つた、色の黒い、なりの低い巖乗な、でく／＼肥つた婦人の方で、私がさういふと顔を赤うした。それから急にツ／＼ケンドンなものいひおしだから、大方其が腹をお立ちの原因であらうと

思ふ。

「母様、それで怒つたの、さうなの。」

母様は合點々々をなすつて、

「おゝ、そんなことを坊や、お前いひましたか。」

そりや御道理だ。」

といつて笑顔をなすつたが、これは私の惡戯をして、母様のおつしやること肯かない時、ちつとも叱らないで、恐い顔しないで、莞爾笑つてお見せの、其とかはらなかつた。

さうだ。先生の怒つたのはそれに違ひない。

「だつて、虚言をいつちやありませんつて、さういつでも先生はいふ癖になあ。ほんたうに僕、花の方がきれいだと思ふもの。ね、母様、あのお邸の坊ちゃんの、青だの、紫だの交つた、着物より、花の方がうつくしいつて、さういふのね。だもの、先生なんざ。」

「あれ、だつてもね、そんなこと人の前でいふのではありません。お前と、母様のほかには、こんないゝこと知つてるものはないのだから。分らない人にそんなこといふと、怒られますよ。唯、ねえ、さう思つて居れば可いのだから、いつてはなりません。」

よ。可い可い。そして先生が腹を立つてお憎みだつて、さういふけれど、何そんなことがありますものか。其は皆お前がさう思ふからで、あの、雀だつて餌を與つて、拾つてるのを見て、嬉しさうだと思へば嬉しさうだし、頬白がをぢさんにさゝれた時悲しい聲だと思つて見れば、ひい／＼いつて鳴いたやうに聞えたぢやないか。

それでも先生が恐い顔をしておいでなら、そんなものは見て居ないで、今お前がいつた、其うつくしい菊の花を見て居たら可いでせう。ね、そして何かい、学校のお庭に咲いてるのかい。」

「あゝ澤山。」

「ぢやあ其菊を見ようと思つて学校へおいで。花はね、ものをいはないから耳に聞えないでも、其かはり眼にはうつくしいよ。」

モひとつ不平なのはお天氣の悪いことで、戸外には、なか／＼雨がやみさうにもない。

五

また顔を出して窓から川を見た。さつきは雨脚が
 繁くつて、宛然、薄墨で刷いたやう、堤防だの、石
 垣だの、蛇籠だの、中洲に草の生えた處だのが、
 點々、彼方此方に黒ずんで居て、それで濕つぽくつ
 て、暗かつたから見えなかつたが、少し晴れて來た
 から、ものゝ濡れたのが皆見える。

遠くの方に堤防の下の石垣の中はどに、置物のや
 うになつて、畏つて、猿が居る。

この猿は、誰が持主といふのでもない。細引の麻
 繩で棒杭に結へつけてあるので、あの、濕地茸が、
 腰辨當の握飯を半分與つたり、坊ちゃんだの、乳母
 だのが、袂の菓子を分けて與つたり、紅い着物を着
 て居る、みいちゃんの紅雀だの、青い羽織を着て居
 る吉公の目白だの、それからお邸のかなりやの姫様
 なんぞが、皆で、からかひに行つては、花を持たせ
 る、手拭を被せる、水鐵砲を浴せるといふ、好きな
 玩弄物にして、其代何でもたべるものを分けてやる
 ので、誰といつて、きまつて世話をする、飼主はな
 いのだけれど、猿の餓ゑることはありはしなかつた。

時々悪戯をして、其紅雀の天窓の毛を雀つたり、かなりやを引掻いたりすることがあるので、あの猿松が居ては、うっかり可愛らしい小鳥を手放にして戸外へ出しては置けない、誰か見張つてゞも居ないと、危険だからつて、ちよい／＼繩を解いて放して遣つたことが幾度もあつた。

放すが疾いか、猿は方々を駈ずり廻つて勝手な道樂をする。夜中に月が明い時、寺の門を叩いたこともあつたさうだし、人の庖厨へ忍び込んで、鍋の大きいのと飯櫃を大屋根へ持つて、あがつて、手掴で食べたこともあつたさうだし、ひら／＼と青いなかから紅い切のこぼれて居る、うつくしい鳥の袂を引張つて、遙に見える山を指して氣絶さしたこともあつたさうなり、私の覺えてからも一度誰かゞ、繩を切つてやつたことがあつた。其時はこの時雨櫃の枝の兩股になつてる處に、仰向に寝轉んで居て、烏の脛を捕へた。それから魚籠に入れてある、あのしめぢ蕈が釣つた、沙魚をぶちまけて、散々悪巫山戯をした擧句が、橋の詰の浮世床のをぢさんに掴まつて、額の毛を眞四角に絞まれた、それで堪忍をして追放したんださうだのに、夜が明けて見ると、また平時

の處に棒杭にちやんと結へてあつた。蛇籠の上の、石垣の中ほどで、上の堤防には柳の切株がある處。またはじまつた、此通りに猿をつかまへて此處へ縛つとくのは誰だらうくツて一しきり騒いだのを私は知つて居る。

で、此猿には出處がある。

其は母様が御存じで、私にお話しなすつた。

八九年前のこと、私がまだ母様のお腹ん中に小さくなつて居た時分なんで、正月、春のはじめのことであつた。

今は唯廣い世の中に母様と、やがて、私のものといつたら、此番小屋と假橋の他にはないが、其時分は此橋ほどのものは、邸の庭の中の一ツの眺望に過ぎないのであつたさうで。今、市の人が春、夏、秋、冬、遊山に来る、櫻山も、桃谷も、あの梅林も、菖蒲の池も皆父様ので、類白だの、目白だの、山雀だのが、この窓から堤防の岸や、柳の下や、蛇籠の上に居るのが見える、其身體の色ばかりが其である、小鳥ではない、ほんたうの可愛らしい、うつくしいのがちやうどこんな工合に朱塗の欄干のついた二階の窓から見えたさうで。今日はまだお言ひでないが、

かういふ^{あめ}雨の降^ふつて淋^{さみ}しい時^{とき}なぞは、
其^{その}時^こ分^ろのこと
をいつでもいつてお聞^きかせだ。

六

今ではそんな楽しい、うつくしい、花園がないかはり、前に橋銭を受取る策の置いてある、この小さな窓から風がはりな猪だの、希代な葦だの、不思議な猿だの、まだ其他に人の顔をした鳥だの、獣だのが、いくらでも見えるから、ちつとは思出になるといつちやあ、アノ笑顔をおしなので、私もさう思つて見る故か、人があるいて行く時、片足をあげた處は一本脚の鳥のやうでおもしろい。人の笑ふのを見ると獣が大きな赤い口をあけたよと思つておもしろい。みいちゃんがものをいふと、おや小鳥が囀るかとかさう思つてをかしいのだ。で、何でも、おもしろくツて、をかしくツて、吹出さずには居られない。だけれど今しがたも母様がおいひの通り、こんないゝことを知つてるのは、母様と私ばかりで、何うして、みいちゃんだの、吉公だの、それから學校の女の先生なんぞに教へたつて分るものか。

人に踏まれたり、蹴られたり、後足で砂をかけられたり、苛められて責まれて、煮湯を飲ませられて、砂を浴せられて、鞭うたれて、朝から晩まで泣通し

で、咽喉がかれて、血を吐いて、消えてしまひさうになつてる處を、人に高見で見物されて、おもしろがられて、笑はれて、慰にされて、嬉しがられて、眼が血走つて、髪が動いて、唇が破れた處で、口惜しい、口惜しい、口惜しい、口惜しい、畜生め、獣めと始終さう思つて、五年も八年も経たなければ、眞個に分ることではない、覺えられることではないんださうで、お亡くなすつた、父様とこの母様とが聞いても身震がするやうな、さういふ酷いめに、苦しい、痛い、苦しい、辛い、惨酷なめに逢つて、さうしてやう／＼お分りになつたのを、すつかり私に教へて下すつたので。私はたゞ母ちゃん／＼てツて母様の肩をつかまへたり、膝にのつかつたり、針箱の引出を交ぜかへしたり、物さしをまはして見たり、裁縫の衣服を天窓から被つて見たり、叱られて遁げ出したりして居て、それでちゃんと教へて頂いて、其をば覺えて分つてから、何でも、鳥だの、獣だの、草だの、木だの、蟲だの、蕈だのに人が見えるのだから、こんなおもしろい、結構なことはない。しかし私にかういふいゝことを教へて下すつた母様は、とさう思ふ時は鬱ぎました。これはちつともおもし

ろくなくつて悲しかつた、勿體ない、とさう思つた。だつて母様がおろそかに聞いてはなりません。私がおもがそれほどの思をしてやう／＼お前に教へらるゝやうになつたんだから、うかつに聞いて居ては罰があたります。人間も、鳥獣も草木も、昆虫類も、皆形こそ變つて居てもおんなじほどのものだといふことを。

とかうおつしやるんだから。私はいつても手をついて聞きました。

で、はじめの内は何うしても人が、鳥や、獣とは思はれないで、優しくされゝば嬉しかつた、叱られると恐かつた、泣いてると可哀相だつた、そしていろんなことを思つた。其たびにさういつて母様にきいて見ると何、皆鳥が囀つてるんだの、犬が吠えるんだの、あの、猿が齒を剥くんだの、木が身ぶるひをするんだのとちつとも違つたことはないつて、さうおつしやるけれど、矢張さうばかりは思はれないで、いぢめられて泣いたり、撫でられて嬉しかつたりしい／＼したのを、其都度母様に教へられて、今ぢやあモウ何とも思つて居ない。

そしてまだ如彼濡れては寒いだらう、冷たいだら

うと、さきのやうに雨に濡れてびしよ／＼行くのを見
ると氣の毒だつたり、釣をして居る人がおもしろ
さうだと然う思つたりなんぞしたのが、此節ぢやも
う、唯、變な蕈だ、妙な猪だと、をかしいばかりで
ある、おもしろいばかりである、つまらないばかり
である、見ツともないばかりである、馬鹿々々しい
ばかりである、それからみいちゃんのやうなのは可
愛らしいのである、吉公のやうなのはうつくしいの
である、けれどもそれは紅雀がうつくしいのと、目
白が可愛らしいのと些少も違ひはせぬので、うつく
しい、可愛らしい。うつくしい、可愛らしい。

七

また憎らしいのがある、腹立たしいのも他にあるけれど、其も一場合に猿が憎らしかったり、鳥が腹立たしかったりするのとかはりは無いので。詮ずれば皆をかしいばかり、矢張噴飯材料なんで、別に取留めたことがありはしなかつた。

で、つまり情を動かされて、悲む、愁ふる、樂む、喜ぶなどいふことは、時に困り場合に於ての母様ばかりなので。餘所のものは何うであらうと些少も心には懸けないやうに日ましにさうなつて來た。しかしかういふ心になるまでには、私を教へるために、毎日、毎晩、見る者、聞くものについて、母様がどんなに苦勞をなすつて、丁寧に深切に、飽かないで、熱心に、懇に嘸んで含めるやうになすつたかも知れはしない。だもの、何うして學校の先生をはじめ、餘所のものが少々位のこと、分るものか、誰だつて分りやしません。

處が、母様と私とのほか知らないことを、モ一人他に知つてるものがあるさうで、始終母様がいつて

お聞かせの、其は彼處に置物のやうに畏つて居る、あの猿ーあの猿の舊の飼主であつたー老父さんの猿廻だといひます。さつき私がいつた、猿に出處があるといふのは此のことで。

まだ私が母様のお腹に居た時分だつて、さういひましたつけ。

初卯の日、母様が腰元を二人連れて、市の卯辰の方の天神様へお参りなすつて、晩方歸つて行らつしやつた。ちやうど川向うの、いま猿の居る處で、堤防の上のあの柳の切株に腰をかけて猿のひかへ綱を握つたなり、俯向いて、小さくなつて、肩で呼吸をして居たのが其猿廻のぢいさんであつた。

大方今の紅雀の其姉さんだの、頬白の其兄さんだのであつたらうと思はれる。男だの、女だの、七八人寄つて、たかつて、猿にからかつて、きやあ／＼いはせて、わあ／＼笑つて、手を拍つて、喝采しておもしろがつて、をかしがつて、散々慰んで、そら菓子をやるワ、蜜柑を投げる、餅をたべさすわつて、

皆みんなでどつさり猿さるに御馳走ごちそうをして、暗くらくなるとどや／＼いつちまつたんだ。で、ぢいさんをいたはつてやつたものは、唯ただの一人ひとりもなかつたといひます。

あはれだとお思おもひなすつて、母様おつかさんがお錢あしを恵めぐんで、肩掛シヨールを着きせておやんなすつたら、ぢいさん涙なみだを落おとして拝をがんで喜よろこびましたつて、さうして、

（あゝ、奥様おくさま、私わたしは獣けだものになりたうございます。あいら、皆畜生みんなちくじやうで、この猿さるめが夥間おなかまでござりませう。

それで、手前達てまへたちの同類どうるゐにものをくはせながら、人間にんげん一疋いっぴきの私わたしには目めを懸かけぬのでござります。）とさういつてあたりを睨にらんだ、恐おそらくこのぢいさんなら分わかるであらう、いや、分わかるまでもない、人ひとが獣けだものであることをいはないでも知しつて居ゐようと、さういつて、母様おつかさんがお聞きかせなすつた。

うまいこと知しつてるな、ぢいさん。ぢいさんと母様おつかさんと私わたしと三人さんにんだ。其時そのときぢいさんが其そのまんまで控綱ひかへつなを其處そこン處ところの棒杭ぼうくひに縛しばりつ放はなしにして猿さるをうつちやつて行ゆかうとしたので、供ともの女中ぢよちゆうが口くちを出だして、何どうするつもりだつて聞きいた。母様おつかさんもまた傍そばからまあ棄すて

兒こにしては可哀相かはいさうでないかツて、お聞きなすつたら、
ぢいさんにや／＼と笑わらつたさうで、

（はい、いえ、大丈夫だいぢやうぶでござります。人間にんげんをかう
やつといたら、餓うゑも凍こえもしようけれど、獸けだものでござ
りますから今いまに長い目ながめで御覽ごらんじまし、此奴こいつはもう
決けつしてひもじい目に逢あふことはござりませぬから。）
とさういつて、かさね／＼恩おんを謝しゃして、分わかれて
何處どこへか行いつちまひましたツて。

果はたして猿さるは餓うゑないで居ゐる。もう今いまでは餘程よつほどの年と
紀しであらう。すりや、猿さるのぢいさんだ。道理だうりで、功こう
を經へた、ものゝ分わかつたやうな、そして生きまじめで、
けろりとした、妙めうな顔かほをして居ゐるんだ。

見みえる／＼、雨あめの中なかにちよこなんと坐すわつて居ゐるのが
手てに取とるやうに窓まどから見みえるワ。

朝晩見馴れて珍しくもない猿だけれど、いまこんなこと考へ出して、いろんなこと思つて見ると、また殊にものなつかしい。あのをかきな顔早くいつて見たいなど、さう思つて、窓に手をついてのびあがつて、ずっと肩まで出すと飛沫がかゝつて、眼のふちがひやりとして、冷たい風が頬を撫でた。

爾時假橋ががた／＼いつて、川面の小糠雨を掬ふやうに吹き亂すと、流が黒くなつて颯と出た。といつしよに向岸から橋を渡つて来る、洋服を着た男がある。

橋板がまた、がツたりがツたりいつて、次第に近づいて来る、鼠色の洋服で、釦をはづして、胸を開けて、けば／＼しう襟飾を出した、でつぷり紳士で、胸が小さくツて、下腹の方が圖ぬけにはずんでふくれた、脚の短い、靴の大きな、帽子の高い、顔の長い、鼻の赤い、其は寒いからだ。そして大跨に、其遅い靴を片足づゝ、やりちがへにあげちやあ歩行いて来る。靴の裏の赤いのがぼつかり、ぼつかりと一

ツづゝ此方から見えるけれど、自分ぢやあ、其爪さ
きも分りはしまい。何でもあんなに腹のふくれた人
は、臍から下、膝から上は見ることがないのだとさ
ういひます。あら！ あら！ 短服に靴を穿いたも
のが轉がつて来るぜと、思つて、ぢつと見て居ると、
橋のまんなかあたりへ来て鼻目金をはづした、飛沫
がかゝつて曇つたと見える。

で、衣兜から手巾を出して、拭きにかゝつたが、
蝙蝠傘を片手に持つて居たから手を空けようとして
咽喉と肩のあひだへ柄を挟んで、うつむいて、珠を
拭ひかけた。

これは今までに幾度も私見たことのある人で、何
でも小兒の時は物見高いから、そら、婆さんが轉ん
だ、花が咲いた、といつて五六人人だかりのするこ
とが眼の及ぶ處にあれば、必ず立つて見るが、何處
に因らず、場所は限らない。すべて五十人以上の人
が集會したなかには必ずこの紳士の立交つて居ない
といふことはなかつた。

見る時にいつも傍の人を誰か知らつかまへて、尻

上りの、すました調子で、何かものをいつて居なかつたことは殆ど無い。それに人から聞いて居たことは嘗てないので、いつでも自分で聞かせて居る。が、聞くものがなければ獨で、むゝ、ふむ、といったやうな、承知したやうなことを獨言のやうでなく、聞かせるやうにいつてる人で。母様も御存じで、彼は博士ぶりといふのであるとおつしやつた。

けれども鰯ではたしかにない、あの腹のふくれた様子といつたら、宛然、鮫鰈に肖て居るので、私は蔭ぢやあ鮫鰈博士とさういひますワ。此間も學校へ參觀に來たことがある。其時も今被つて居る、高い帽子を持つて居たが、何だつてまたあんな度はづれの帽子を着たがるんだらう。

だつて、目金を拭かうとして、蝙蝠傘を頭で押へて、うつむいたと思ふと、ほら、ほら、帽子が傾いて、重量で沈み出して、見てるうちにすつぱり、赤い鼻の上へ被さるんだもの。目金をはづした上へ帽子がかぶさつて、眼が見えなくなつたんだから驚いた、顔中帽子、唯口ばかりが、其口を赤くあけて、あわてゝ、顔をふりあげて、帽子を揺りあげようとしたから蝙蝠傘がぱつたり落ちた。落こちると勢よ

く三ツばかりくる／＼と舞つた間に、鮫鯨博士は五ツばかりおまはりをして、手をのばすと、ひよいと横なぐれに風を受けて、斜めに飛んで、遙か川下の方へ憎らしく落着いた風でゆつたりしてふはりと落ちると、忽ち矢の如くに流れ出した。

博士は片手で目金を持つて、片手を帽子にかけたまゝ、烈しく、急に、殆ど數へる隙がないほど靴のうらで虚空を踏んだ、橋ががた／＼と動いて鳴つた。

「母様、母様、母様。」

と私は足ぶみした。

「あい。」としづかに、おいひなすつたのが背後に聞える。

窓から見たまゝ振向きもしないで、急込んで、

「あら／＼流れるよ。」

「鳥かい、獣かい。」と極めて平氣でいらつしやる。

「蝙蝠なの、傘なの、あら、もう見えなくなつた
い、ほら、ね、流れツちまひました。」

「蝙蝠ですと。」

「あゝ、落ッとしたの、可哀相に。」

おも
と思はず歎息たんそくをして呟つぶやいた。

おつかさん
母様は笑えみを含ふくんだお聲こゑでもつて、

「廉れんや、それはね、雨あめが晴はれるしらせなんだよ。」

このときまる
此時猿さるが動うごいた。

一廻くるりと環にまはつて、前足をついて、棒杭の上へ乗つて、お天氣を見るのであらう、仰向いて空を見た。晴れるといまに行くよ。

母様は嘘をおつしやらない。

博士は頻に指して居たが、口が利けないらしかつた。で、一散に駈けて来て、黙つて小屋の前を通らうとする。

「をぢさん／＼。」

と厳しく呼んでやつた。追懸けて、

「橋錢を置いて去らつしやい、をぢさん。」

とさういつた。

「何だ！」

一通の聲ではない。さつきから口が利けないで、あのふくれた腹に一杯固くなるほど詰め込み詰め込みして置いた聲を、紙鐵砲ぶつやうにはじきだしたものらしい。

で、赤い鼻をうつむけて、額越に睨みつけた。

「何か。」と今度は鷹揚である。

私は返事をしませんかった。それは驚いたわけではない、恐かつたわけではない。鮫鰈にしては少し顔がそくはないから何にしよう、何に肖て居るだろう、この赤い鼻の高いのに、さきの方が少し垂れさがつて、上唇におつかぶさつてる工合といつたらない、魚より獣より寧ろ鳥の嘴によく肖て居る。雀か、山雀か、さうでもない。それでもないト考へて七面鳥に思ひあたつた時、なまぬるい音調で、

「馬鹿め。」

といひすてにして、沈んで来る帽子をゆりあげて行かうとする。

「あなた。」とおつかさんが屹とした聲でおつしやつて、お膝の上の絲屑を、細い、白い、指のさきで二ツ三ツはじき落して、すつと出て窓の處へお立ちなすつた。

「渡をお置きなさらんではいけません。」

「え、え、え。」

といつたがじれつたさうに、

「俺は何ぢやが、うゝ、知らんのか。」

「誰です、あなたは。」と冷かで、私こんなのを聞くとすつきりする。眼のさきに見える氣にくはな

いものに、水をぶつかけて、天窓から洗つておやんなさるので、いつでもかうだ、極めていゝ。

鮫鯨は腹をぶく／＼さして、肩をゆすつたが、衣兜から名刺を出して、策のなかへまつすぐに恭しく置いて、

「かういふものぢや、これぢや、俺ぢや。」

といつて肩書の處を指した、恐しくみじかい指で、黄金の指環の太いのをはめて居る。

手にも取らないで、口のなかに低聲におよみなすつたのが、市内衛生會委員、教育談話會幹事、生命保險會社社員、一六會會長、美術奨励會理事、大野喜太郎。

「この方ですか。」

「うゝ。」といつた時ふつくりした鼻のさきがふら／＼して、手で、胸にかけた何だか徽章をはじいたあとで、

「分つたかね。」

こんどはやさしい聲でさういつたまゝまた行きさうにする。

「いけません。お拂はらひでなきやアあとへお歸かへんなさい。」とおつしやつた。

先生せんせい妙な顔かほをしてぼんやり立たつてたが少すこしむきになつて、

「えゝ、こ、細こまかいのがないんぢやから。」

「おつりを差さしあげませう。」

おつかさんは帯おびのあひだへ手てをお入いれ遊あそばした。

母様はうそをおつしやらない。博士が橋錢を置いて遁けて行くと、しはらくして雨が晴れた。橋も蛇籠も皆雨にぬれて、黒くなつて、あかるい日中へ出た。榎の枝からは時々はら／＼と雫が落ちる。中流へ太陽がさして、みつめて居るとまばゆいばかり。

「母様遊びに行かうや。」

此時鉄をお取んなすつて、

「あゝ。」

「ねえ、出かけたつて可いの、晴れたんだもの。」

「可いけれど、廉や、お前またあんまりお猿にからかつてはなりませんよ。さう可い鹽梅にうつくしい羽の生えた姉さんが何時でもあるんぢやありません。また落つこちやうもんなら。」

ちよいと見向いて、清い眼で御覽なすつて、莞爾してお俯向きで、せつせと縫つて在らつしやる。

さう、さう！ さうだつた。ほら、あの、いま頬つぺたを搔いて、むく／＼濡れた毛からいきりをたて、日向ぼつこをして居る、憎らしいツたらない。

いまだやあもう半年も経つたらう。暑さの取着の晩方頃で、いつものやうに遊びに行つて、人が天窓を撫で、やつたものを、業畜、悪巫山戯をして、キツノ、と齒を剥いて、引掻きさうな劍幕をするから、吃驚して飛退かうとすると、前足でつかまへた、放さないから力を入れて引張り合つた奮みであつた。左の袂がびり／＼と裂けて斷れて取れた、はずみをくつて、踏占めた足がちやうど雨上りだつたから、堪りはしない。石の上を、這つて、ずる／＼と川へ落ちた。わつといつた顔へ一波かぶつて、呼吸をひいて仰向けに沈んだから、面くらつて立たうとする、また倒れて、眼がくらんで、アツとまたいきをひいて、苦しいので手をもがいて身體を動かすと唯どぶん／＼と沈んで行く。情ないと思つたら、内に母様の坐つて在らつしやる姿が見えたので、また勢づいたけれど、やつばりどぶん／＼と沈むから、何うするのかなと落着いて考へたやうに思ふ。それから何のことだらうと考へたやうにも思はれる。今に眼が覺めるのであらうと思つたやうでもある、何だか茫乎したが俄に水ん中だと思つて叫ばうとすると水をのんだ。もう駄目だ。

もういかんとあきらめるトタンに胸が痛かった、それから悠悠々と水を吸つた、するとうつとりして何だか分らなくなつたと思ふと、■と絲のやうな眞赤な光線がさして、一幅あかるくなつたなかに此の身體が包まれたので、ほつといきをつくと、山の瑞が遠く見えて、私のからだは地を放れて、其頂より上の處に冷いものに抱へられて居たやうで、大きなうつくしい目が、濡髪をかぶつて私の頬ん處へくつゝいたから、唯縋り着いてぢつとして眼を眠つた覺がある。夢ではない。

やつぱり片袖なかつたもの。そして川へ落こちて溺れさうだつたのを救はれたんだつて、母様のお膝に抱かれて居て、其晩聞いたんだもの。

だから夢ではない。

一體助けて呉れたのは誰ですつて、母様に問うた。私がものを聞いて、返事に躊躇をなすつたのは此時ばかりで、また、それは猪だとか、狼だとか、狐だとか、頬白だとか、山雀だとか、鮫鯨だとか、鯖だとか、蛆だとか、毛蟲だとか、草だとか、竹だとか、松茸だとか、濕地茸だとかおいひでなかつたのも此

時ときばかりで、そして顔かほの色いろをおかへなすつたのも此この
時ときばかりで、それに小ちひさな聲こゑでおつしやつたのも此この
時ときばかりだ。

そして母おつかさん様はかうおいひであつた。

（廉れんや、それはね、大おほきな五ご色しきの翼はねがあつて天てん上じやうに
遊あそんで居ゐるうつくしい姉ねえさんだよ。）

(鳥なの、母様。)とさういつて其時私が聞いた。

此にも母様は少し口籠つておいであつたが、

(鳥ぢやあないよ、翼の生えた美しい姉さんだ

よ。)

何うしても分らんかつた。うるさくいつたら、し

まひにや、お前には分らない、とさうおいひであつ

たのを、また推返して聞いたら、やつぱり、

(翼の生えたうつくしい姉さんだつてば。)

それで仕方がないからきくのはよして、見ようと

思つた。其うつくしい翼のはえたもの見たくなつて、

何處に居ますノ、ツて、セツついても、知らないと、

さういつてばかりおいであつたが、毎日々々あま

りしつこかつたもんだから、とうノ、餘儀なささう

なお顔色で、

(鳥屋の前にもいつて見て來るが可い。)

そんならわけはない。

小屋を出て二町ばかり行くと、直ぐ坂があつて、

坂の下口に一軒鳥屋があるので。樹蔭も何にもない、

お天氣のいゝ時あかるい／＼小さな店で、町家の軒
ならびにあつた。鸚鵡なんざ、くるツとした、露の
たりさうな、小さな眼で、あれで瞳が動きますよ。
毎日々々行つちやあ立つて居たので、しまひにやあ
見知顔で私の顔を見て頷くやうでしたつけ、でもそ
れぢやあない。

駒鳥はね、丈の高い、籠ん中を下から上へ飛んで、
すがつて、ひよいと逆に腹を見せて熟柿の落ちちる
やうにぼたりとおりて、餌をつゝいて、私をばかま
ひつけない、ちつとも氣に懸けてくれようとはしな
かつた、それでもない。皆違つてる。翼の生えたう
つくしい姉さんは居ないのツて、一所に立つた人を
つかまへちやあ、聞いたけれど、笑ふものやら、嘲
けるものやら、聞かないふりをするものやら、つま
らないとけなすものやら、馬鹿だといふものやら、
番小屋の嬢々に似て此奴も何うかして居らあ、とい
ふものやら。皆獣だ。

（翼の生えたうつくしい姉さんは居ないの。）ツ
て聞いた時、莞爾笑つて兩方から左右の手でおうや

うに私の天窓を撫でゝ行つた、それは一様に緋羅紗のずぼんを穿いた二人の騎兵で――聞いた時――莞爾笑つて、兩方から左右の手で、おうやうに私の天窓をなでゝ、そして手を引あつて黙つて坂をのぼつて行つた。長靴の音がぼつくりして、銀の劍の長いのがまつすぐに二ツならんで輝いて見えた。そればかりで、あとは皆馬鹿にした。

五日ばかり學校から歸つちやあ其足で鳥屋の店へ行つて、ぢつと立つて、奥の方の暗い棚中で、コトノゝと音をさして居る其鳥まで見覺えたけれど、翼の生えた姉さんは居ないので、ぼんやりして、ぼツとして、ほんたうに少し馬鹿になつたやうな氣がしいノゝ、日が暮れると歸り歸りした。で、とても鳥屋には居ないものとあきらめたが、何うしても見たくツてならないので、また母様にねだつて聞いた。何處に居るの、翼の生えたうつくしい人は何處に居るのツて。何とおいひでも肯分けないものだから母様が、

（それでは林へでも、裏の田圃へでも行つて、見ておいで。何故ツて、天上に遊んで居るんだから、

籠かごの中に居ゐないのかも知しれないよ。)

それから私わたし、あの、梅林ばいりんのある處ところに参まゐりました。

あの櫻山さくらやまと、桃谷ももたにと、菖蒲あやめの池いけとある處ところで。

しかし、其それは唯青葉たゞあをばばかりで、菖蒲あやめの短みじかいのがむ

らがつてゝ、水みづの色いろの黒くろい時分じぶん、此處こゝへも二日ふつか、三

日みづかっつ續つけて行いきましたつけ、小鳥ことりは見みつからなかつた。

鳥からすが澤山たんとあ居ゐた。あれが、かあ／＼鳴ないて一ひとしきりし

て静しづまると其姿そのすがたの見みえなくなるのは、大方おほかた其翼そのはねで、

日ひの光ひかりをかくしてしまふのでせう。大おほきな翼はねだ、ま

ことに大おほき翼はねだ、けれどもそれではない。

日が暮れかゝると、彼方に一ならび、此方に一ならび、横縦になつて、梅の樹が飛々に暗くなる。枝々のなかの水田の水がどんよりして淀んで居るのに際立つて眞白に見えるのは鷺だつた。

二羽一處に、ト三羽一處に、ト居て、そして一羽が六尺ばかり空へ斜に足から絲のやうに水を引いて立つてあがつたが音がなかつた、それでもない。

蛙が一齊に鳴きはじめる。森が暗くなつて、山が見えなくなつた。

宵月の頃だつたのに、曇つたので、星も見えないで、陰々として一面にものゝ色が灰のやうにうるんでゐた、蛙がしきりになく。

仰いで高い處に、朱の欄干のついた窓があつて、そこが母様のうちだつたと聞く。仰いで高い處に、朱の欄干のついた窓があつて、そこから顔を出す、其顔が自分の顔であつたんだらうにトさう思ひながら破れた垣の穴ん處に腰をかけてぼんやりして居た。いつでもあの翼の生えたうつくしい人をたづねあ

ぐむ、其書のうち精神の疲勞ないうちは可いんだけれど、度が過ぎて、そんなに晩になると、いつも、かう滅入つてしまつて、何だか、人に離れたやうな、世間に遠ざかつたやうな氣がするので、心細くもあり、裏悲しくもあり、覺束ないやうでもあり、恐しいやうでもある。嫌な心持だ、嫌な心持だ。

早く歸らうとしたけれど、氣が重くなつて、其癖神經は鋭くなつて、それで居てひとりであくびが出た。あれ！

赤い口をあいたんだと、自分でさうおもつて、吃驚した。

ぼんやりした梅の枝が手をのばして立つてるやうだ。あたりをみすと眞暗で、遠くの方で、ほう、ほうつて、呼ぶのは何だらう。冴えた通る聲で野末を押ひろげるやうに、鳴く、トントントントと、何にあたるやうな響きが遠くから來るやうに聞える鳥の聲は、梟であつた。

一ツでない。

二ツも三ツも。私に何を談すのだらう、私に何を

話すのだらう。鳥がものをいふと慄然として身の毛が彌立つた。

ほんたうに其晩ほど恐かつたことはない。

蛙の聲がます／＼高くなる、これはまた仰山な、何百、何うして幾千と居て鳴いてるので、幾千の蛙が一ツ一ツ眼があつて、口があつて、足があつて、身體があつて、水中中に居て、そして聲を出すのだ。一ツ一ツ、トわな／＼いた。寒くなつた。風が少し出で、樹がゆつさり動いた。

蛙の聲がます／＼高くなる。居ても立つても居られなくツて、そつと動き出した。身體が何うにかなつてるやうで、すつと立ち切れないで踞つた、裙が足にくるまつて、帯が少し弛んで、胸があいて、うつむいたまゝ天窓がすわつた。ものがぼんやり見える。

見えるのは眼だトまたふるへた。

ふるへながら、そつと、大事に、内證で、手首をすくめて、自分の身體を見ようと思つて、左右へ袖をひらいた時、もう、思はずキヤツと叫んだ。だつて私が鳥のやうに見えたんですもの。何んなに恐かつたらう。

此時、背後から母様がしつかり抱いて下さらなかつたら、私何うしたんだか知れません。其はおそくなつたから見に来て下さつたんで、泣くことさへ出来なかつたのが、

「母様！」といつて離れまいと思つて、しつかり、しつかり、しつかり襟ん處へかじりついて仰向いてお顔を見た時、フツト気が着いた。

何うもさうらしい、翼の生えたうつくしい人は何うも母様であるらしい。もう鳥屋には、行くまい。わけてもこの恐しい處へと、其後ふつゝり。

しかし何うしても何う見ても、母様にうつくしい五色の翼が生えちやあ居ないから、またさうではなく、他にそんな人が居るのかも知れない、何うしても判然しないで疑はれる。

雨も晴れたり、ちやうど石原も、迂るだらう。母様はあゝおつしやるけれど、故とあの猿にぶつかつて、また川へ落ちて見ようか不知。さうすりやまた引上げて下さるだらう。見たいな！

羽の生えたうつくしい姉さん。だけれども、まあ、可い。母様が在らつしやるから、母様が在らつしや

つたから。

【完】